

討しても、sFas 高値群で有意に生命予後が悪かった。同様に、健常者16例、腎癌患者術前60例の sFasL も測定したが、すべての症例で測定感度以下であった。

術後1, 4, 12週間後の血清を採取し得た腎癌患者58, 18, 10例については、腎摘除の前, 1週間後, 4週間後, 12週間後の sFas の平均値はそれぞれ 2.630, 3.674, 2.764, 2.524 ng/ml であった。術後早期(1週間)の血清 sFas は、術期の急性相反応物質として生体から産生されたものとも考えられた。4週間後には18例中12例が手術前の値に復しており、全体としてt検定からも前値と同レベルであることが示された。

【結論】

1. low stage など、従来予後良好と考えられていた因子を持つ患者群でも、術前の sFas 値によって生命予後に差が認められた。このことから、術前の sFas の測定が、腎癌患者における有用な予後規定因子となると思われた。

2. 術後早期(1週間)の血清 sFas は、むしろ術期の急性相反応物質として生体から産生されたものと考えられた。

3. sFasL は、白血病やリンパ腫で上昇するといわれるが、腎癌についてはその臨床的意義は薄いものと思われた。

10) 前立腺癌ホルモン療法施行中の再発再燃症例に対する内服ホルモン剤中止後のホルモン感受性

西山 勉・照沼 正博(長岡中央総合病院)

【目的】ホルモン療法施行中の再発再燃症例に対する内服ホルモン剤中止後の前立腺特異抗原(PSA)の推移により、癌のホルモン感受性の有無を確認できるかどうかを検討した。【対象, 方法】ホルモン療法施行中、再発再燃時に内服ホルモン剤を中止し、その後も増悪または再再燃を認めた16例に対して DXM 1.0~1.5 mg/日を投与した。【結果】内服ホルモン剤中止後 PSA が50%以上低下した4例では全例、再再燃後の DXM 投与により PSA が90%以上の再低下を認めた。内服ホルモン剤中止後 PSA が50%未満低下した8例では、再再燃後の DXM 投与により PSA が90%以上の再低下を認めたものが4例、PSA が50%以上の再低下を認めたものが4例であった。内服ホルモン剤中止後も PSA が上昇しつづけた4例では DXM 投与によって

も PSA は上昇しつづけた。【結語】ホルモン療法施行中の再発再燃症例に対しては内服ホルモン剤中止後の PSA の推移を観察することにより、ホルモン感受性の有無を確認できると思われた。

II. 各領域における腫瘍切除後の再建

11) 乳癌における一期的乳房再建術

三浦 宏二(がん検診クリニック三浦外科)
川合 千尋(消化器科・外科川合クリニック)

乳房温存手術によって乳癌患者の QOL は大幅に改善されたが、いまだに過半数の患者は癌遺残の懸念などから乳房切除術を余儀なくされている。我々は、これまで乳房切除の適応と考えられてきた症例に対し、乳腺全切除続き、広背筋を用いた一期的乳房再建術を行い、oncological および cosmetic に良好な成績を得ているので報告する。

手術適応はマクロで皮膚、乳頭、胸筋に癌浸潤がない症例で、施行例は84例である。まず仰臥位で皮膚と乳頭を温存した乳腺全切除とリンパ節を行う。次に側臥位とし、皮下脂肪を十分につけた有茎広背筋弁を採取して、これを欠損部に充填して再建を行う。平均手術時間は2時間50分、重篤な合併症はなかった。2例で皮弁に局所再発を認めたが全例局所切除が可能であった。アンケートで不満足と答えた症例はなかった。

この手術法は安全かつ簡便で美容的効果も高く、患者にもたらす恩恵は大である。

12) 胃切除後の再建術式と逆流症状の評価

金子 耕司・田邊 匡
海部 勉・鈴木 俊繁
林 達彦・神田 達夫
西巻 正・鈴木 力(新潟大学
畠山 勝義 第一外科)

今回我々は胃手術後の逆流症状の実体を評価しその対策を検討するために、胃手術後外来通院中の109例にアンケート調査を施行し、有症状例には薬物を投与し効果を検討した。内訳は胃全摘・B-I再建が64例、胃全摘・R-Y再建33例、胃全摘・空腸間置5例、噴門側胃切除・空腸間置3例、胃部分切除4例であった。アンケートの調査内容は胸やけ、胸背部痛、しみる感じ、嚥